

急増する医療訴訟の現状を打開するため、患者や家族と医療者側の間で中立的な立場から介入する医療メデイエーターという役割とメデイエーターマインドのある医療の実践が期待されているが、医療の現場ではホスピスマインドこそもっと重視すべきである。

五年前、F院長の熱意が実を結び、函館市内のO病院にホスピス（緩和ケア病棟）が誕生したが、同病院に福岡からやってきたのが、道南初の認定看護師となったSさんだ。大学病院の勤務時代、末期がん患者へぎりぎりまで行う治療への疑問と、終末期医療の本との出会いによりホスピスケアへの道を進んできた。

ある日、病棟で小走りしていたSさんを見て「ドラえもんのように」と口走った。ドラえもんのイメージと重ねたのは姿形のことではない。疼痛コントロールは身体的な痛みを単独で考えるのではなく、常に精神的・社会的・スピリチュアルな側面からも考えなければいけない。Sさんが患者や家族に寄り添っているとき、話の内容こそわからないが彼女が信頼されていることはよくわかる。彼女のポケットにはさまざまな痛みを取り除くためのたくさん道具が入っている。

ホスピスとは死にゆく人と家族を全人的に支えていくケアのプログラム。ホスピスマインドは相手を思いやる心だ。Sさんはポケットから最良のケアプログラムを選んで取り出す。ホスピスマインドはポケットにはない。思いやる心は彼女自身だからである。

（メデイカルはこだて発行・編集人）

つかもと・あつし 函館市生まれ。



函館東高校を経て高崎経済大経済学部卒。百貨店勤務を経て2001年に医療介護の雑誌「メデイカルはこだて」を創刊。函館市在住。52歳。

ホスピスのドラえもん

塚本 敦志

立待岬